「思想と実生活」論争

――小林秀雄敗北の意味――

丸川　浩

一

吉田凞生氏もすでに指摘していること[1]だが、文壇に登場して間もない頃の小林秀雄を、プロレタリア派の文学者達だけでなく、芸術派の文学者達も、「古い」批評家と見做していたという事実は、興味深い。このように、小林秀雄が「古い」批評家と見做される理由の一端は、恐らく、「様々なる意匠」（昭4・9）以後、「文芸春秋」に連載された文芸時評の中で、滝井孝作や牧野信一などの、時流の外にある作家達を認めていくといった、小林の批評姿勢にあっただろうことは疑いない。また、後に文脈から離れて、その一行だけが浮遊し人口に膾炙した、「批評するとは自己を語る事である、他人の作品をダシに使つて自己を語る事である。」（「アシルと亀の子Ⅱ」昭5・5）のような語句が、その背後にある小林の思索の跡が理解されることなく、「白樺派」的聡明さのように受け取られたことにもよるだろう。

現在、近代批評の確立者としての小林秀雄の名声はゆるぎないものとなっている。右のような理解も、つまりは、当時の人々にとって、小林の登場の「新しさ」が、一目瞭然とは理解され難かったという事実を示しているに過ぎない、ということになるだろう。しかし、右のような理解が、全くの誤解だったという具合にすまされるわけではない。「世の若く新しい人々へ」という副題を付した「志賀直哉」（昭4・12）を、「私にこの小論を書かせるものは……（略）……又、騒然と粉飾した今日新時代宣伝者等に対する私の嫌厭でもある。」と書き出さなければならなかった小林は、自分の「古さ」を充分意識していたと思われるからである。勿論、ここには、同時代文学者から一歩進み出ているという「新しさ」への自負も隠されている、ということを認めた上で、そう言いたいのである。何故なら、小林の批評的感性は、かなりの部分「古い」時代の文学（主として大正期の文学）につながっているのではないか、と思うからである。初期の小林のプロレタリア文学批評も、それまでに小林が獲得した「新しい」理論によってでなく、そういう批評的感性をプロレタリア文学の観念性に対置されることによって、有効性を持ち得たのではないだろうか。

ところで、よく知られているように、「私小説論」（昭10・5～8）の中では、プロレタリア文学評価が表われる。ここでの小林の状況認

識に見られるのは、マルクス主義思想の移入とその後の混乱によって、自分の主張する自意識の文学の生まれ出る土壌ができ上がったという判断である。すなわち、小林の「新しい」理論を生かすことの出来る状況が出現したという判断である。ここでは、小林の批評的感性は、一応背後に隠されて、理論の「新しさ」ばかりが前面に出て来る。小林秀雄の昭和十年前後は、新時代文学をリードしていく姿ばかりが鮮やかな時期なのである。小林のこのような積極的な姿勢と、そこに展開された理論は、後々まで大きな影響力を持っており、当然、正当な評価が与えられるべきであると思われるが、しかし、一方で、その内実はどうだったのだろうかという疑問が、私にはある。

「古い」時代の文学者の中でも、特に手強い存在であった正宗白鳥を相手にして、昭和十一年一月から半年にわたって続けられた「思想と実生活」論争について考えることは、そういう疑問を解明するための有効な手がかりとなるはずである。本稿では、「思想と実生活」論争における小林秀雄の敗北という見方に立って、その敗北の意味を明らかにし、右のような疑問に答えるための一段階としたい。

二

「思想と実生活」論争は、『トルストイ未発表日記・一九一〇年』(文学アカデミア註釈・八住利雄・上脇進訳、昭10・12、ナウカ社刊)についての正宗白鳥の感想「トルストイについて」(「読売新聞」昭11・1月11、12日)に、小林秀雄が、「作家の顔」(「読売新聞」昭11・1月24、25日)で反論を加えたことから始まった。以後、両者の応酬は、白鳥「文芸時評」(「中央公論」昭11・3)、小林「思想と実生活」(「文芸春秋」昭11・4)、白鳥「文芸時評」(「中央公論」昭11・5)、小林「文学者の思想と実生活」(「文芸春秋」昭11・6)という順序で展開された。

論争というものの性格上、単純に勝敗を決定することは出来ないが、現在、多くの論者が、小林秀雄の敗北という見方をしていることが注目される。戦後の白鳥・小林の対談[2]を踏まえて、「論争の結末はこの対談においてあきらかに小林の敗北となっている。もしくは抛物線をえがいて白鳥の線に重っている。」[3]と、比較的早い時期に、小林の敗北を確認したのは、星加輝光氏だが、後に、三好行雄氏も、「小林秀雄は手をかえ品をかえ、執拗に城を攻めつづけた。しかし、白鳥の城を抜くことはついにできなかった。」[4]という具合に、やはり小林の敗北を認めている。また、論争の意義が、これまで小林の側からしか捉えて来られなかった点を批判し、「(論争の意味は、小林サイドの問題でなく――引用者注)『思想の現実性』といった小林の視点が、実は白鳥の批判の前に徐々に風化、無力化せざるを得なかった必然性――いいかえれば、白鳥における『肉体』の思想の現実性、およびその持続力、生命力の根強さといった問題なのである。」[5]というように、肉体性に根ざす白鳥の「実生活」理念の強固さの方に、論争の意義を見出そうとする石阪幹将氏のような論もある。

よく知られているように、論争の発端となったのは、トルストイの家出問題に対する正宗白鳥の何げない感想であった。「何げない」と付け加えたのは、すでに白鳥は、大正十五年七月の別稿「トルストイについて」(「中央公論」)の中で、ゴーリキーの『トルストイの思ひ

出」について触れ、「トルストイを人道主義者としたり聖人としたりして、その前に合掌礼拝してゐるに留まらないで、この怪物的人物の核心を稍々摑んでゐるところがあつた。」という具合に書き、聖人としてのトルストイ像を疑問視し、実生活的苦悩者としてのトルストイ像に共感を示していたからである。つまり、そういう白鳥にとって、トルストイの家出の背後に実生活的苦悩を見出すことは、それまでの自説を再確認するに過ぎなかったはずなのである。恐らく、白鳥の中には、以前から、既成のトルストイ像に対する強い反発があり、それが「トルストイの未発表日記」という新資料の出現によって、再燃したのだろう。

人生救済の本家のやうに世界の識者に信頼されてゐたトルストイが、山の神を恐れ、おど〳〵と家を抜け出て、孤往独邁の旅に出て、ついに野垂れ死した径路を日記で熟読すると、悲壮でもあり滑稽でもあり、人生の真相を鏡に掛けて見る如くである。あゝ、我が敬愛するトルストイ翁！

（「トルストイについて」昭11・1）

右の有名な一節の戯文めいた調子の中にも、白鳥の、世のトルストイ信者に対する痛烈な皮肉が感じられるだろう。そもそも、正宗白鳥の側には、「思想」と「実生活」との関係についての原理論的関心はなく、そういう関心から、強引に白鳥の感想に嚙み付いて来たのは、小林秀雄である。

あらゆる思想は実生活から生れる。併し生れて育つた思想が遂に実生活に訣別する時が来なかつたならば、凡そ思想といふものに何の力があるか。

（「作家の顔」昭11・1）

小林の原理論的主張は、右の一節につきる。ここに、「思想」上の問題を、「実生活」次元に引きずりおろして解釈しようとする白鳥の発想に対する反発があるのは言うまでもないが、重要なことは、小林が、原理的には、「思想」と「実生活」は切り離されるべきだと考えている点である。そういう小林の論に対する白鳥の反応（「文芸時評」昭11・3）は、「小林氏の所説は必ずしも愚説とは云へない。」としながら、「人を強く動かすものは、やはり現実の力である。」とし、トルストイの家出問題については、「トルストイが現身の妻君を憎み妻君を恐れて家出したことは、断じて間違ひなしである。」と自説を繰り返し、小林の原理論についても、「実生活と縁を切つたやうな思想は、幽霊のやうで案外力がないのである。」と一蹴するものであった。以後の論争の経緯については、詳細に検討をしていく余裕はないが、白鳥も小林も右の地点から一歩も退くことなく、論争は結局平行線に終わったように見える。

繰り返すことになるが、論争に明らかな勝敗というものはあり得ない。しかし、論争が論争として成り立つためには、お互いが相手の論に触発されて、自分の論を発展させなければならない。その場合、論争の過程の中でお互いの立場は一層明らかになっていく。白鳥と小林の論争では、お互いの立場が、どのように明らかになっただろうか。

白鳥は、「文芸時評」（昭11・5）の中で、小林の「思想と実生活」（昭11・4）の中の、「実生活を離れて思想はない。併し、実生活に犠牲を要求しない様な思想は、動物の頭に宿つてゐるだけである。」という箇所に触れ、「これは一通りの穏当な見解である。」と認め、当

初、小林が「思想」と「実生活」の分離を主張した見解が、「意味のない空言になるのではあるまいか。」と非難している。白鳥は、小林の当初の主張が腰くだけになり、「昭和の現代文士らしい常識に成下つてしまつたらしい」と難じているのである。小林はそれに対して、「文学者の思想と実生活」（昭11・6）の中で、文学の論戦では結論が重要な場合は少ないとして、「結論とは何か。云ふまでもなく、これらの（思想と実生活の問題などの――引用者注）互いに対立する人間的事実は、世の実相に於ては、弁証法的に統一された、或は統一の可能性を孕んだ形で現はれてゐるといふ結論だ」と、結論を問題とすることの無意味さを指摘し、次のように書いている。

ただ、僕が正宗氏に理解して戴きたい点は、「思想が実生活に訣別するに至らなければ、思想といふものに何の力があるか」といふやうな奇嬌な言を弄した所以のものは、結局喋つてゐるうちに思想と実生活とは切つても切れぬ縁があるといふ以外の結論に到達し得なかつたといふ事とは自ら別だと言ふ点なのだ。思想を実生活から絶縁させようといふ様な狂気の沙汰を誰が演ずるか。結論は最初に在つたのである。

「思想を実生活から絶縁させ」ることを、「狂気の沙汰」と言っている点に注意したい。小林の「思想」と「実生活」分離の主張は、「実生活」を否定し、「思想」の中に立て籠って安住の境地を得るということでなく、「実生活」をも無化してしまうような「思想」の力にとり憑かれてしまった悲惨な状態を言っているのである。白鳥は、この点を誤解して、「中世紀人にでも類似した境地」（「文芸時評」昭11・5）のように理解している。江藤淳氏は、小林の主張する「思想」の意味を、「マルクス主義文学者たちがそうであると信じた進歩的人道的唯物論の『善』ではなく、まさに人を苦痛や『死』にいざなう『邪悪な』力であった。『思想』とは『悪』である。」[6]と規定しているが、「思想を実生活から絶縁させようといふ様な狂気の沙汰を誰が演ずるか。」（傍点引用者）という言い方自体、小林が「思想」を一義的に善的なものと見做していないということを示しているだろうし、また、「思想」が「悪」だという認識を認めれば、「思想」の絶対性を敢然と打ち出し、一見理想主義的に見えた小林の方が、実は白鳥よりも一層深い虚無主義に根差していたということにもなろう。論争を通じて明らかになるのは、小林の一見明快な「思想」と「実生活」との分離という原理論的主張が内包する、苦渋の意識と、そういう苦渋の意識など理解しない、もしくは理解する必要のない白鳥との立場の違いである。それだけ、白鳥の「実生活」重視の考えは、根強く頑固なものであったとも言える。諸家の説くように、論争は、そういう白鳥の頑固さを前にして、小林が攻め苦しんでいるという印象が強いのである。

では、何故小林は白鳥の頑固な発想を叩く必要があったのだろうか。「思想と実生活」論争における小林秀雄敗北の意味を探る前に少し廻り道をして、本論争における小林の発想のもとを辿って置こう。

三

小林秀雄の批評家としての登場の持つ重要な意味の一つが、自意識論にあったということは周知の事実であろう。自意識という語が、文学史上いつ頃に初めて登場するかは、にわかに断定出来ないが、恐ら

く、小林秀雄が横光利一などを巻き込む形で広め、現在かなり一般化したことばとなったものであろう。それはまさしく、大正的な「私」とか「心境」ということばが存在しにくい、昭和という時代が要請したことばであったと言えよう。小林秀雄の登場には、そうした時代の要請を背後に見出すことが出来るだろう。

「様々なる意匠」（昭4・9）で、文壇に登場する二年前に書かれた「『悪の華』一面」（昭2・11）の中で、小林は自意識について次のように書いている。

如何なる人間も多少の自意識を必要とする。つまり生きるといふ事が自意識を強請するからだ。だが多くの人々にとつて結局自意識といふものは生活防衛の一手段として最も消極的な形式の裡に止まつてゐる。河の流れが石に衝突して分岐する様に、彼等は外象に触れて解析する。かゝる人々にとつて自意識する主体に触れんとする事は流れを溯行する事で生きる事ではない。彼等は唯流れる。人生の劇に於いて同時に俳優たり観客たることはボオドレエルにとつてかゝるオオトマテイスムの最も精妙な形式に過ぎなかつた。そこで彼は自意識を自意識した。人々の生きる事が彼には死ぬ事であつた所以である。

「『悪の華』一面」は、自意識家ボードレールの像を描くことによって、近代的文学者の創造へ至る過程を、綿密に辿ってみせたものである。すでに多くの指摘があるように、ここに小林秀雄の批評原理のエッセンスがあるということは疑いないが、右の引用文に見て取られるように、芸術（思想）と実生活の問題について、この時点で、すでに語られていることは注目に値する。

ここでは、一般生活者と芸術家とは、はっきり区別して論じられている。「自意識」を、文字通り「自分」に対する「意識」と考えれば、それは、人が生きていく上でどうしても必要なものであろう。自分についての最小限のイメージも持っていないような人間は、あり得ないからである。従って、一般生活者にとって「自意識」とは、「生活防衛の一手段」に過ぎない、と言えよう。しかし、芸術家にあっては、「自意識」とは、そういう消極的な存在にとどまらない。彼は、「唯流れる」ことを拒絶する。人が生活するとは、他者（それを「社会」とも「自然」とも言ってよい）と折れ合うということだが、小林の言いたいことは、ひとたび、「自意識」の虜（「自意識を自意識する」）となってしまうと、人の流れに従って生活していくこと自体が疑わしいものとなってしまう、ということであろう。かなりこちらで補足した解釈となってしまったが、つまり、そのような懐疑を通過するかどうかということが、人が芸術家となるかどうかの分岐点になるというように、小林は考えているのである。

小林のこうした思考の中には、実生活的な欺瞞を拒絶した上に、芸術という独自な世界の存在を認めるといった潔癖主義がうかがえるが、それはともかく、「自意識」による懐疑によって、実生活否定に至ることが、人が芸術家となるための前提条件だとするならば、実生活に没入し、そこから「心境」を謳い上げる自然主義系流の作家達が、「自意識」以前の存在として、小林の目に映るのは当然のことであろう。そういう地点からの自然主義文学批判は、小林の初期からしばしば繰り返されている。「アシルと亀の子Ⅰ」（昭5・4）の中では、「宿命的に感傷主義に貫かれた日本の作家達が、理論を軽蔑して来た事は

当然である。」、「作家が理論を持つとは、……（略）……この世に生きて何故芸術制作などといふものを行ふのか、といふ事に就いて明瞭な自意識を持つといふ事だ。」と述べ、さらに次のように書いている。

人は先づ鶯の歌から始めるものだ。素朴な実在論者として心を歌ひ、花を歌ふ事から始めるものだ。この歌ひ手がそのまゝ芸術制作の年期奉公に移動して了ふ。年季を入れてゐる裡に、浮世の心労と技術の修練とによつて彼の作家たる宿命の理論は獲得されては行くのだが、それは冥々の裡に獲得されるのであつて、遂に理論は其人の血肉となり、味ひとなり、色気となつて沈黙して了ふより他に道はない。これが現代日本文学の達人大家といはれてゐる人々の一般的色彩だ。

これが、自意識家ボードレールに、近代的文学者の一つの極を見た、小林の描いた旧時代文学者の姿であった。

「思想と実生活」論争における小林の発想の根は、以上に見て来たような文壇登場以前からの自意識論にあった、とまずいうことが出来る。ただし、それはストレートにつながっているのではなく、そこには、もう一つ別な要素が加わっている。それは、昭和十年前後の文学状況の認識であり、小林自身の批評姿勢の変化である。

四

正宗白鳥に論争を挑んだ小林秀雄の意図は、論争中の小林自身の次のような発言に明瞭である。

僕は正宗氏の虚無的思想の独特なる所以については屢々書きもしたし、尊敬の念は失はぬ積りであるが、氏の思想には又わが国の自然主義小説家気質といふものが強く現はれてゐるので、さういふ世代の色合ひが露骨に感じられる時には、これに対して反抗の情を禁じ得なくなるのである。

（「文学者の思想と実生活」昭11・6）

「自然主義小説家気質」とは、論争の中の小林の発言から察すると、文学者の「抽象的思想」よりも、その背後にある「実生活」的事実の重みの方に興味を示すという発想法を指すようだが、白鳥の「虚無的思想」には、「尊敬の念は失はぬ積りであるが」と断わった上で、小林の批判は、白鳥個人にではなく、白鳥の中にはっきりと表われた右のような発想一般に向けらている。そういう意味では、小林秀雄の批判には、時代の文学状況に対する目配りが感じられる。

当時の小林の状況認識を最も鮮明に語っているのは、「私小説論」（昭10・5～8）である。そこでは、それまでの小林にない整然とした論理で、現代文学の見取り図を描いていた。そこに取り上げられた近代日本の作家達――田山花袋から横光利一、具体的な名前は出て来ないが、プロレタリア文学者達に至るまで――の多くが、当時まだ現役の作家達であったということは、日本の近代文学というものが、どれほど短期間のうちに成熟へと向かっていったかという事実を示すと同時に、「私小説」の論が、まさしく現代的な課題である所以を示しているだろう。小林は、「私小説論」の中でマルクス主義思想の移入によって、私小説作家達の「文士気質なるもの」は征服されたと断定するのだが、一方で、当の私小説作家達は、プロレタリア文学運動の最盛期に一時的沈黙はあったものの、その活動を停止したわけではな

かった、というのが当時の状況だったのである。小林が、時代の文学状況を、主にマルクス主義思想の移入による「混乱」と捉え、この「混乱」こそが文学の糧であり、作家も批評家も、この「混乱」を見据えることから出発するしかないのだという覚悟について語り出すのは、昭和八年頃からだが、「私小説論」は、そのような「混乱」の歴史的背景を明らかにし、ジイド流の新しい個人主義文学の像を提出することによって、「混乱」の収拾に方向性を与えようと意図されたものだと、一応言うことが出来るだろう。一応と断わるのは、「私小説論」の結末部の曖昧さから、小林の真意が読み取りにくいからであるが、大略の図式としては、このように読み取ることは可能であろう。

一年後に、「思想と実生活」論争で、正宗白鳥の何げない感想に反駁の筆を執ったのも、かつて死を宣告した旧文学の側から、再び根強い私小説的な発想が出現したのを見て取ったからだと考えることが出来る。

ここには、新時代文学の側に積極的に身を寄せた、小林秀雄の姿が見出される。平野謙には、この論争の中に見られる、「正宗白鳥によって代表される自然主義的人間観に決然と反噬することによって、昭和の新文学を双肩にになおうとする小林秀雄の姿勢」を積極的に評価しようとする一連の論がある。平野の言うように、小林の姿が颯爽としたものかどうかは異論があるが、先の引用文の「世代の色合が露骨に感じられる時には」という箇所や、後の回想の「私には私で、正宗氏より一時代新しい文壇に出たといふ意識があり」(「正宗白鳥の作について」昭56・1)という箇所にも明らかなように、小林に新時代文学者としての自覚があって、白鳥に論争を挑んだことは間違いない。

いわゆる昭和十年前後の小林秀雄は、こういう言い方が許されるなら、著しく啓蒙的な時期である。それまでの専ら否定的な発想法を捨て、かなり肯定的な提言も試みているのである。そこには、小林独自の状況認識が投影している。それは、せんじ詰めれば、自分達の文学の時代が到来したという認識でもあったろう。旧時代の文学者達には、そろそろ舞台をおりてもらわなければならない。少し意地の悪い見方をすれば、「思想と実生活」論争の小林には、周囲に、新時代の文学観の存在を見せつけるために、白鳥の昔ながらの自然主義的文学観を叩いて見せる必要があったと言えなくもない。周囲を意識したスタンドプレイであったと言えば言い過ぎになろうか。青野季吉は、「白鳥・小林の論争を固唾をのんで見まもつてゐた」[8]と書いているが、それだけこの論争が人々の注目を浴びたことは事実である。

卑俗なレベルの話になってしまったが、勿論、この論争を際立たせているのは、ここにそれだけの問題性があったからである。ましてや、小林の論の背後には、初期からの自意識論もひかえていた。いわば、この時期の小林の批評活動と、初期に獲得された理論と、その両方を賭けて、白鳥と戦ったと言ってよいのである。

しかし、そうでありながら、この論争を読み返す時に、小林秀雄の敗北という印象が強いということは、どういう意味を持つのだろう。

五

「思想と実生活」論争における敗北の意味について考える時に、まず確認して置きたい点は、本稿「二」で見たように、ここでの小林の

の原理論的主張の奥に、苦渋の意識が存在していた点である。それは、正宗白鳥の簡明な議論に押されて、論争の過程の中で、ますますはっきりして来たことであったが、白鳥の「トルストイについて」に反論した「作家の顔」の中で、すでに、次のように書かれていた。

僕は、今日までやつて来た実生活を省み、これを再現しようといふ欲望を感じない。さういふ仕事が詰らぬと思つてゐるからではない。不可能だと思ふからだ。泥の中を歩いて来た自分の足跡を、どうして今眺められようか。今時私小説の書ける人はきつと砂地を歩いて来たのだらう。僕は自ら省みて、人間とは何物でもないと信じてゐる。ただここに再建すべき第二の魔神について恥づかしい想ひをしてゐるだけである。

私小説作家に対する皮肉も散りばめられているが、「実生活」再現が「不可能だと思ふ」と言っている点、「泥の中を歩いて来た自分の足跡」という生々しい表現をしている点など、かなり率直に、小林自身の心情が語られていると考えるべきだろう。ここに、例えば、昭和八年五月に書かれた「故郷を失つた文学」の中の、「故郷を失つた文学を抱いた、青春を失つた青年達」という自己規定を重ね合わせて見れば、小林の苦渋の意識には、昭和の自我解体状況が正確に反映しているということが理解できるだろう。つまり、小林は、自我の基盤となるような「実生活」はすでに失われていると考えているのである。小林の自意識論は、そういう自分の立つ苦しい地点から出て来ているのである。ついでに言えば、白鳥には、このような事情は理解されていない。そして、このような苦渋の意識は、一方で、新時代文学者としての自負の念ともつながっているのであって、苦渋の意識と自負の念は、ともに、いわば自我解体状況という同じ母胎から出て来ているのである。

小林の新時代文学者としての自負の裏付けとなっていたのは、小林の理論、特に自意識論であったことは言うまでもない。自意識は、必然的に「実生活」否定の契機を含んでおり、それを経過した後に、人は創造へと進んで行く。ただし、それは創造へ至るための前提であって、創造という行為そのものではない。そればかりか、小林の中では、自意識自体は、出口のない球体として意識されていた。それは、一般に応用がきくような性質のものではなかっただろう。批評原理から見れば、「新しい」小林の批評が、実際に作品について語る段になると、「古い」批評的感性に、多くよらなければならなかった理由の一端には、こういう事情があっただろう。

事実、「思想と実生活」論争に至るまでの小林の批評活動には、一見、小林が獲得した理論とは相容れないような別の流れが見出せるのである。そういう流れから見ると、小林秀雄と正宗白鳥とは、本来さして隔っていない地点に立っていたようにも見えるのである。

一つは、対正宗白鳥評価ということである。論争以前に、小林は幾度か正宗白鳥に讃辞を贈っていた。ここで詳しくは立ち入らないが、「正宗氏は、人生を信用してゐない様に小説といふものを信用してゐない。」(「文学は絵空ごとか」昭5・9)とか、「文学の立場にたつて、見事に文学の立場を追ひ抜いてゐる光景ではないか。」(「年末感想」昭7・12)とかの評言が示すように、小林は、白鳥の、文学にしがみついていない、非文学者然とした態度に共感を示していた。また、「氏を自然主義作家などと呼んでみた処で、氏の作家たる心に関して何物

も暗示出来ない」（「文学は絵空ごとか」）という具合に、いわゆる自然主義作家とは、一線を画した存在として、白鳥には特別の敬意を表していたのである。

もう一つは、「肉体」の思想、「実生活」理念に対する小林の立場である。「肉体」という用語を、多くの場合、小林は肯定的な意味合いで使用していた。例えば、「氏の感傷は、佐藤氏のものに比べれば、遙かに肉体に根を下ろしたものである。」（「室生犀星」昭6・4）、「氏が肉体的経験に置く絶対の信頼でかゞやいてゐる。」（「谷崎潤一郎」昭6・5）というようにである。また、小林はかつて、「実生活にとつて芸術とは屁の様なものだ」（「批評家失格Ⅰ」昭5・11）と言い切っていた。小林秀雄も、また、正宗白鳥と同じように、「肉体」性の重み、「実生活」の重みというものを、充分承知していたというべきであろう。

しかしながら、このような立場は、少なくとも「思想と実生活」論争における小林秀雄の主張の前面には出て来ないのである。前面に出ているのは、小林の状況認識と、初期の自意識論の延長線の論理である。自分達の時代がやって来たという状況判断と、自意識理論を媒介とする自然主義文学批判が交差した地点から、小林の主張は出て来ている、と言ってよいだろう。小林の対白鳥評価、「実生活」理念の容認といった立場が、背後に隠れてしまったのは、それだけ、小林自身の状況認識に対する思い込みが強かったためと言えるだろう。とすれば、論争における小林の敗北の意味は、論争相手である正宗白鳥にではなく、小林自身の状況認識そのものに関わってくると言うべきであろう。

ここで、小林の状況認識について、繰り返して述べることは避け、「思想と実生活」論争における小林の主張を、当時のプロレタリア文学の転向者が、どのように見ていたかということに触れて置こう。彼等こそ、小林が、自らの主張に、最も耳を傾けてもらいたかった文学者たちだったはずだからである。一つは、青野季吉の見方である。青野は、「白鳥・小林のトルストイ論争」（昭26・9）の中で、大正十五年の自分と白鳥との論争を振り返り、「プロレタリア文学の唱導は、文学方法としてはともかく文学精神からは、自然主義の生活主義にたいする思想主義の対置であった」とし、自分と白鳥の論争は、「たうぜん思想と実生活の問題に発展すべき性質のものだった」、「それを十年後に、小林がトルストイの家出といふ事実の解釈にからんで、白鳥を相手に発展させてくれたのだ」というように書いている。つまり、青野は、小林の主張に、自分達の立場の代弁を見ているのである。もう一つは、中野重治の見方で、「閏二月二九日」（昭11・4）の中では、「とにかく分るところだけを見ると、実生活から別れて行つた思想だけが大思想であつて、さしづめ小林などは大思想家といふことになりさうになる。」という皮肉が書き付けられている。同じ文章の、別の箇所には、小林のエピゴーネンの大学生の話をあげ、「かういふ新しい文学的エピゴーネンは、生活から生まれた考へや思想を言葉にするまではいいが、言葉にした途端にそれを鬼として化石させて、それを恐れることでセンチメンタルな遊戯に耽ってゐるのに過ぎない。」とも書かれている。つまり、中野は、小林の主張に、文学主義的な観念性をかぎつけ、否定しているのである。

両者の間には、世代的な差や資質的な差があり、見方が違っている

のは当然だと言えようが、青野は、小林に共感を示し、中野は、頑として小林を拒否していることは、興味深い。特に、「閏二月二九日」の中で、中野は、小林のそれまでの批評活動全体を拒否しているので、そこに、中野の小林への敵対意識の根深さをうかがい知らされるのである。[9]

それにしても、小林への敵対意識はともかくとして、やはり、中野重治の批判は、小林にとって手痛い部分を衝いていたように思う。「思想と実生活」論争における小林の主張には、確かに、中野の批判するような観念性がつきまとっていた。初期の小林の批評活動の中心には、プロレタリア文学の観念性、概念性を衝くという活動があった。そういう観念性、概念性に対置されるものが、文壇登場以前に獲得された理論そのものの直接的投影でなく、個人の感情といった、「古い」時代につながる批評的感性によるものとならざるを得なかった事情については、先に触れた。「思想と実生活」論争では、小林は、自分の理論が生かされる時代が来たという状況認識に基づき、白鳥の根強い「実生活」理念を相手にして、それまでの自分の立場を逆転させ、観念的とすら思える主張を敢えてしたのである。青野季吉が、自分達の立場の代弁者として小林を見ていたのも当然であったと言えよう。

江藤淳氏は、「『思想と実生活』論争が今日の読者に示しているのも、小林の孤独な認識と当時の通念との断絶である。」（『小林秀雄』）と書いている。果して、小林一人だけが、何もかも承知していたのだろうか。そこに、小林の状況認識自体に甘さはなかったのだろうか。それまでの自分のプロレタリア文学に対する立場を逆転させてまで、小林が、「実生活」に訣別した「思想」の存在を提示したのは、自意識論が有効性を持つ新しい時代を迎えた、という状況認識があったからである。その前に書かれた「私小説論」の中で、ジイド流の自意識の文学を提出したのも、同じ状況認識に発していただろう。しかし、小林の思い描いたように、それらが根付くような文学状況になっただろうか。そういう問題について、詳しく論ずるのは別の機会を待ちたいが、ただ、そういうことも、小林自身が逸早く気付いたらしいことだけは言い添えて置いてよさそうである。

「菊地寛論」[10]の中で、菊地寛に、「生活者」の像を見出し、讃辞を贈ることになるのは、「思想と実生活」論争終了の半年後、昭和十二年一月のことであった。

〔注〕

（1）吉田凞生「後記」（『論集・小林秀雄Ⅰ』麦書房　昭41・7）。

（2）「大作家論」（『光』昭23・1）。問題となるのは、次のやりとりである。

小林　僕が思想というようなことをしきりに言ったらば、正宗さんは、思想なんて何でもない、トルストイの殺生石のようなにおいの方が大事だとおっしゃった。当時、僕にはまだはっきりしていなかったことなんですが、殺生石は正宗さんの憧れだったんですな、あれは正宗さんの思想だ。

正宗　悩みというものに対して？

小林　ええ。実生活的悩みというものに対して、ですね。

（3）星加輝光「白鳥に対する小林秀雄」（『九州作家』昭32・8、10）。

（4）三好行雄「昭和期の文学論争」（『国文学』昭36・7）。

（5）石阪幹将「思想・実生活論争の文学的意義」（『文芸研究』昭53・3）。

（6）江藤淳『小林秀雄』（講談社　昭36・11）。

（7）平野謙『昭和文学史』（筑摩書房　昭38・12）。

（8）青野季吉「白鳥・小林のトルストイ論争」（「文学界」昭26・9）。
（9）小林秀雄は、中野重治の「閏二月二九日」の批判に対して、「中野重治君へ」（東京日日新聞」昭11年4月2、3日）で応えている。
（10）原題「菊地寛」（「中央公論」昭12・1）。

〔付記〕

「思想と実生活」論争の引用文は、『現代日本文学論争史　下』（未来社昭31・7）の本文に依った。その他の、小林秀雄の引用文は、『小林秀雄全集』（新潮社　昭42～43）に依った。ただし、漢字体は現行の漢字体に書き改めた。

本稿を完成させるまで、終始磯貝英夫先生の御指導を賜った。感謝申し上げる。